

Spring, 2004

Volume 4 Issue 1

大阪国際大学

海外の日本研究と英語【松井嘉和】

2003年8月、ヨーロッパ日本研究協会(eajs)の第10回目の4年毎の研究大会が初めて東欧の地フルシャワで開かれ、580名もの参加者があったという。発表テーマも人文科学のあらゆる分野にわたっている。このeajsは、1972年、京都での国際日本研究者会議をきっかけに、15カ国47名の参加者で創設され、2000年には会員が650人に達していた。

この欧州での日本研究の広がりは、世界の動向を象徴的に示している。国際交流基金では、1980年代初めから、全世界を対象に日本研究機関と研究者のdirectoryの制作を始め、『～(国名か地域名)の日本研究』と題された冊子を、90年代中頃までに邦文と英文で全大陸を網羅した成果をあげている。筆者は1984年初版で2年後に再版された『ソ連・東欧の日本研究』のルーマニアの部分を執筆している。

世界の日本研究の動向は、この国際交流基金のdirectory seriesの他に、国際日本文化研究センターが、366の日本研究機関から得た回答をまとめた

『海外日本研究機関一覧1995』、さらに1800の機関にアンケートをして518から得た回答をまとめた2000年版を刊行している。福岡ユネスコ協会も定『海外日本研究機関要覧』(Overseas Japanese Studies Institutions)を定期的に出している。世界の日本研究は、こうした一覧が意味をもつほど盛んなのである。そして、その状況に目を向けるとき、研究者ではない人々や中等教育課程の生徒などの間で日本語が急速に普及している事実が思い合わされてくる。今、海外の日本語教育機関は世界の至る所に存在し、学習者は200万人にも及んでいる。この現状は、日本語が、一部の日本研究家が学ぶだけの特異な言語ではなくなっていることを示している。

ある地域の研究には、そこで使われている言語の習得が欠かせないのだから、日本語の普及は日本研究者の広がりを保証するはずだ。だが、日本語の普及と日本研究が同時並行で発展しているのだとも思えない。日本研究の多くの場面で、世界語の様相を呈している英語が主要言語とされているのだ。

そんな現実に接したのは、2000年、フィンランドで開かれたeajsの第9回研究大会に参加したことだった。eajsの公用語は英語で、大会の使用言語も英語だった。『平家物語』の異本に見られる世界観の相違の研究発表を聞いたとき、言

及される用語のほとんどが日本語でありながら、説明する言語は英語であった。日本語だけのほうが聞き手はもちろん本人も楽ではないのか、と思いつつも、英語が世界語となっている現実を思い知られた。

今や、わが国のほとんどの古典はもちろん現代作家の新作さらには漫画までもが英訳されて、英語から多くの言語に重訳されている。日本語を知らないても、英語で日本研究ができる時代の到来を思わせる。ここにも現代における英語の地位の高さが見て取れる。

この現実は、日本語学習に時間を割く必要がないことから、日本研究に関わる人が増えるなどの効果もあるが、この分野ですらなぜ日本語が公用語にならないのだろうか。

国連に圧倒的に多額の拠出金を出し、使用人口も世界で7~8位という日本語が国連での公用語にもならないことと何か通底する要因があるのだろうか。日本研究の現状を語ろうと筆を執ったが、英語の世界支配という現実が日本研究という場でもあるのだと再確認することになってしまった。



欧州日本研究協会(eajs)フルシャワ大会の会場風景、キブルツEAJS会長挨拶(国際交流基金日本研究課長柳沢賢一氏撮影)



eajs フルシャワ大会で熱心に聞き入る人びと(国際交流基金日本研究課長、柳沢賢一氏撮影)

ことわざとその意味

【加賀 伸彦】

「すべての道はローマに通ず」。このことわざはあまりにも有名ですが、その正確な意味となると現在ではほとんど忘れられているようです。事実、学生諸君にこのことわざの意味について尋ねてみると、たいていの場合、きよとんとした顔で「道は全部ローマに通じているということじゃないですか」と文字通りの答えが返ってくることがほとんどで、質問をしたこちらのほうがなんだか愚かしく見えてしまうこともあります。これではローマには直接道が通じていない（はず）の日本では意味を成さないことわざということになりそうです。本来のことわざとしての意味は、たとえどのような異なった道を進もうと、その究極の目的は同じものであり、その手段が異なるにすぎないということです。ものの本によると初出は17世紀のフランスの寓話詩人ラ・フォンテーヌということになっており、事実彼の寓話詩集の最後の作品にこの表現が出てきます。仲の良い三人の友人が一人は裁判官となり、一人は病院長、もう一人は隠者となります。人の苦しみや悩みを救おうとする点では同じ目標に向かっているということになります。とはいえ、この表現がすでにことわざとして当時定着していたからこそ、ラ・フォンテーヌはこの表現を用いたのでしょうかから、おそらく初出はもっと古く、多分誰が言い出したかはいつまでも不明ということになるでしょう。そして、はじめはことわざとしてその比喩的な意味を十分なインパクトとしてもっていたはずのこの表現も、時代を経るにしたがってその具体的な内容を失い、単なる文字通りの言葉としてしか記憶されなくなってしまったと思われます。

ローマの道ではありませんが、パリにはいくつもの大通りがあり、そのほとんどは19世紀半ば、皇帝ナポレオン3世の命を受けて、パリの市長であったオスマン侯爵によって作られたものです。サン・ジェルマン大通り、レンヌ通り、サン・ミシェル大通り、オスマン大通りなどいくつもの大通りがパリを斜めに走っており、観光客である我々は19世紀になぜこんな広い通りが必要であったのかよく疑問に思うことがあります。調べてみるとこんなにも大きな通りを必要としたのも、実は当時の社会情勢にあったということが分かります。つまり、当時頻繁に起こっていた民衆の蜂起をなるべくすみやかに鎮圧するために、軍隊を送りやすくするための広い道路だったわけです。大勢

毎日が勉強…でも充実した張りのある日々

—英語教師へのチャレンジ【三村ゆり】(国際コミ、2001年度卒業生)

はじめまして、寝屋川市第十中学校で一年の英語科を担当させていただいている三村です。4月から勤務し、約

7ヶ月が過ぎましたが、まだまだ自分の未熟さを感じています。

私の仕事は英語を教えることだけではないのですが、今のところ授業を行うことで精一杯になっています。学校行事（例

えば、体育大会や合唱コンクールなど）の仕事は他の先生方に助けられながら、なんとかクリアしている状態です。

仕事をするにあたり、気をつけていすることは、生徒とのより良い関係を持つことです。朝の挨拶をしたり、授業以外でいろんな話をしたり、できる限り人と人の関わりが持てるようにしています。学校行事では普段授業では見られない生徒の様子を知ることができます。とても勉強になります。

授業を行うにあたり、教材研究にはかなりの時間をかけていますが、なかなか納得のいく授業を行うことは難し

いです。ただ、授業を受けている生徒が喜んでくれるように小道具、例えば、ぬいぐるみやピコピコハンマー（ゲームセンターのもぐらたきに使用するもの）などをたくさん使い、インパクトのある授業を目指しています。また、授業は生徒指導の場もあります。全ての生徒が平等に授業を受けられるように、寝ている生徒・おしゃべりしている生徒に注意したりもします。単語テストやリスニングテストで満点が取れた生徒には、パーさんのシールをはって、生徒の励みになるようにしています。このように毎日試行錯誤の状態ですが、時間が立つにつれ、生徒との距離もなくなり、楽しい時間をすごせるようになりました。

大変な時も本当に多くありますが、私はこの仕事が好きです。まだ講師の立場なので、来年どうなるかわかりませんが、とてもよい勉強になります。教師になろうと考えている学生のみなさん、この仕事はやりがいがあり、自分自身をすごく成長させる仕事だと思います。くじけるときや泣きたくなるときも多いかもしれません、その分だけ強くなれます。お互いにがんばりましょう。

参加しよう—海外ボランティア活動【滝本 裏】

本学の学生によるボランティア活動は、平成10年度に発足し本年度で6年連続実施されることになります。このボランティア活動は二つのプログラムからできています。一つは海外の大手や高校などの日本語授業クラスで、ボランティアとして日本語を教えるプログラムです。もう一つは、本学の提携大学であるバンコック大学（タイ）の学生と共同で、タイの村落で教育用

施設の建設作業に加わるプログラムです。

日本語教育ボランティアとして学生を派遣するのは、ハノイ外国语大学、ハノイ国際貿易大学、ホンバン大学（ベトナム）、上海華東師範大学（中国）、東州大学、慶南情報大学（韓国）、クライストチャーチ工科大学、リカートン高校（ニュージーランド）、ナレスワン大学（タイ）、93学校（モンゴル）と6カ国に渡ります。

このボランティア活動の教育的意味は、参加した本学学生が教室で教えたり、施設を建設する一方、それぞれの国で同世代の若者と行動を共にして交流、その国の文化理解を深めることです。自分が出かけた国の文化に興味をもち、帰国後その国の文化を研究、卒論にする学生もいます。毎年この海外ボランティア活動には約30名の学生が参加します。将来もっと多くの学生が参加し、それが国際理解を深めることができれば、本学の教育理念に沿ったさらに意味のある国際ボランティア研修になると思われます。

の兵隊や大きな大砲を運んでいくためには、あれぐらいの広さが必要とされたのでした。またそういう目的で作られた道であったため、それらの道はすべて現在のパリ警視庁（現在はシテ島にあり、当時は軍隊の駐屯地でした）に直接通じる幹線道路でした。そういう意味ではローマの道（大部分は軍用道路であった）と大差はないといえるかもしれません。その道が現在では観光客がパリを散策するための格好の道になってしまったのも時代の移り変わりを示すものといえるでしょう。

私の目に映った「変貌する上海」【黄志軍】

かつては東洋の「魔都」と呼ばれ、今では東アジア最大の国際商業都市となった上海。面積約 6340 平方キロメートル（大阪府と京都府をあわせた面積は約 6506.5 平方キロ）の土地におよそ 1300 万の人口が住んでいる。上海は一体いつごろから大きく変化を遂げて今日の姿になったのか。各種のデータによる統計上の数字よりも、ここでは個人的な体感で上海の変化について触れてみたい。

1988 年、9 年間に及ぶ日本での留学を終え、故郷上海に戻った私を、上海の空気も街もそして人々も 9 年前とほとんど変わらない姿で迎え入れてくれた。1980 年代の後半に個人営業がようやく許されるようになっていた。自分で作った農産物を売りに来る農民や、近郊の農村から農産物を仕入れて販売する個人営業者が商魂を發揮して、年間 1 万元以上を稼ぎ出す人が出てきた。「万元戸」という言葉が流行ったのはこの時期だった。大学講師の年収が 1300 元の時代だから、かなりの金持ちである。農産物を個人で売り買ひする自由市場が住宅の周辺に出現するようになったことが私の目に映った唯一の変化だったかもしれない。

1989 年には天安門事件が世界中を震撼させたが、上海では市政府の施策がうまく機能し、大きな混乱は見られなかつた。後に、その手腕が鄧小平に買われて、市党委員会書記だった江澤民が党中央の党書記に、市長だった朱鎔基は国家総理に抜擢された。

1990 年代の幕開けとともに、上海は今までの束縛から解き放たれたように猛烈なスピードで変貌への道を突き進んだ。2000 年までの 10 年間は、建設ラッシュと個人企業創設の最盛期であった。上海市全体が建設現場と化し、空気は塵埃にまみれ大地は建設機械の振動に震えていた。かつては、個人営業者が農産物を取り扱っているにすぎなかつたのが、今や、商業、不動産業、電子産業などほぼ全業種にわたって個人企業が雨後の筈のように出現していた。一方では、人口 13 億を越える世界最大の市場を当て込んで、外国資本が上海にだれ込んで来た。

10 年間で上海はすっかり変貌した。地下鉄が走り高層ビル群の間にフリーウェイが廻らされ、街中はかつてないほど物に溢れている。広いマイホームに住み自家用車で出勤すること、家事手伝いのパートを雇うことが上海の富裕層のステータスになりつつある。計画経済だった時期に安定していた物価が 10 年間で約 10 倍に上がったにもかかわらず、平均収入が 20 ~ 30 倍になったこともあって、人々は高消費生活をエンジョイしている。

10 年間の経済発展によって、大きな歪みもまたもたらされた。急速な高層ビルの建設によって引き起こされた地盤沈下。空気と水資源の汚染。金儲けに走った農民による健康無視の農作物への農薬散布。最高価格が 1 億 8 千万円もある超高級マンションが即日完売する一方で、月額 1 万円程度の失業保険でぎりぎりの生活しか出来ない失業者が存在することに象徴されるように、貧富の格差は拡大する一方であるにもかかわらず、社会福祉制度や保険制度は急激な変化にまったく追いつかない。

2010 年に予定される上海万博まで、上海は高い経済成長率を維持すると専門家達は見ている。これから 10 年は上海の未来を形作る 10 年だと思われる。ハードの建設よりも、これからはソフトの整備に力を注ぐべきであろう。今までの歪みや負の遺産を解消し、まだ 10 年ほどしか経験のない市場経済を守りながら改善していくことがからの上海に残された課題であるかもしれない。

一度動き出した上海の発展は、これからも止まることなくますますその歩みを速めていくであろう。少なくとも私はそう信じている。

翻訳コンテストに作品を出そう 求む、あなたの原稿！【浅香佳子】

センターでは、外部の民間団体による翻訳コンクールを支援しています。現在のところ、「絵本翻訳コンクール」と「映画字幕コンテスト」の応募原稿を募集しています。絵本の方は毎年 11 月締め切りで、入選すればあなたの絵本が出版され、その褒賞として 25 万円が支給されます。昨年は世界の絵本が 5 冊、課題として出されました。映画は春締め切りで、一作品の字幕スーパーを作成して原稿を送付します。「絵本翻訳コンクール」は「新世研」の主催、「映画字幕コンテスト」は「スペースアルク」の主催です。

今回のグアテマラ、イラン、中国、ブラジル、チベットなどから 6 冊が課題として出された。

*The Magic Book
Return from the Slaughterhouse
The Owl Who Wanted to See the Sun
The Long Haired Girl
Move Faster, Pigeons
The Horse of Seven Colors*

これら 6 冊は枚方および守口図書館にあります。

語学センター主催コンテスト結果

第 9 回 English Essay Contest 入賞者

- 1 位 Le Thi Da Lam 國際コミュニケーション 3 回生
- 2 位 品川 絵里 人間健康 3 回生
- 3 位 北中 優希 國際文化 2 回生

第 16 回 English Speech Contest 入賞者

- 1 位 新垣 理恵 國際コミュニケーション 2 回生 GU
- 2 位 大石 絵里香 心理コミュニケーション 1 回生 ICC
- 3 位 品川 絵里 人間健康 3 回生

第 6 回 日本語 Speech Contest 入賞者

- 1 位 関 曜琳 中国・国際コミュニケーション 3 回生
- 2 位 Ersolak Hasan Emre トルコ・経営情報 2 回生
- 3 位 尚 菲 中国・国際コミュニケーション 1 回生

英語インテンシブコース派遣奨学生便り

一米国名門ジョージタウン大学短期留学を終えて—
American Conversational English Program(ACE) を終えて帰国し、その体験を話してくれました。

2003年夏、第一期派遣奨学生が約一ヶ月間の

熱い討論で英語力アップ、国際交流の輪も広がった… 【久世綾子】(国コミ2回生)

授業内では、スペイン、ウクライナ、韓国、そして台湾など世界各国から集まった仲間と、世界共通のアカデミックな問題を討論(debate)したり、様々なテーマについて発表(presentation)をしたりして、国際的なコミュニケーション能力を培うことができました。特に、討論は日本では経験できないほど熱く、時間内に会話が途切れることはありませんでした。初めのうちは、その勢いに圧倒されてしまいがちでしたが、イタリア人のクラスメートが、日本人の温厚な性質まで理解しアドバイスをしてくれました。そのおかげで、自信がつき、英語での的確にまた素早く、自分の意見を述べる会話能力を磨くこともできました。年齢も国も価値観も違う仲間と様々な意見を交わしながら、人としても大きく成長できたと思います。それに加えて、通常の講義の合間に元 CIA の一員による特別講

義や野外研究などを通して、アメリカの文化や歴史を感じる機会を得ることができました。私は現在もフランス、韓国、そしてコスタリカの友人たちと、E-mail で交流を続けています。今回の留学は、英語能力の向上はもちろんのこと、国際交流の輪を広げることもでき、本当に貴重な三週間だったと思います。



久世綾子さんと先生の Ms. Lynn Bolton

ACE プログラムとは? 【南 健司】(経営情報学科2回生)

ワシントン D.C. にあるジョージタウン大学への短期留学「ACE プログラム」で体験・学習した事を、下記の五ポイントにまとめて報告する。

授業 基礎的なテストが施されて、受講者全員が幾つかのクラスに分けられた。平日の授業は午前と午後の 2 クラス、いずれも授業時間は 2 時間。複数グループに分かれてあるトピックについて討論をした後、2、3 人一組の小グループに分かれてプレゼンテーションを行う。

交友関係 受講生は世界のさまざまな国々から来ている。最初は多少戸惑いもあったが、自分から積極的に会話を持ちかけていくとすぐに親しい友達ができ、週末には、ショッピングや映画鑑賞と一緒に楽しむ事もできた。

宿泊施設 大学の宿泊施設又はホームステイのどちらかを選ぶ。ドミトリの場合は、ホームステイより費用が安く、

安全。また多くの学生たちと話し合いの場をもてる。ホームステイの場合は、炊事など、ある程度生活面でのサポートが得られる。生活に役に立つ情報もたくさんくれた。なお、友人との外食などで帰宅時間が遅くなる場合は必ず一本電話をいれること。

治安 D.C. は合衆国内でも非常に治安の良い都市だが、海外であることを忘れてはいけない。夜の一人歩きはもちろんのこと、知らない場所へはできる限り複数で行く方が良い。万が一タクシーに乗る場合は運転手に行き先、目的地を明確に伝えること。日常生活においては最低限のルールやマナーを守っていれば安全である。パスポートはむやみに持ち歩かないこと。

観光 ホワイトハウス、スミソニアン博物館、ナショナルパークなど、世界的に有名な観光地が多く、交通の便もよい。休日を利用してボルチモアやニューヨークといった大都市を訪れるのも良いと思う。

ワシントン D.C. での経験 【柳瀬 真紀】(国際コミ2回生)

2003年7月19日～8月18日までワシントンで過ごしました。滞在中は、ほぼ毎日 D.C. の観光を楽しみました。ホワイトハウスや、スミソニアンそれに遊園地と、到底書ききれないほどの思い出があります。その中で、特別な思い出となっているのがボトマックリバークルーズです。滞在中にお世話になったジョージタウン大学の先生が私達四人をクルーズでの夕食に招待してくれました。船の上からの夜景はすばらしいもので、普段の景色とは違って見えました。その日は授業の最終日だったので、少しあみい気持ちも混じっていましたが、その日のことは鮮明に覚えています。

私の一番大切な思い出となっているのは、一ヶ月間一緒に暮らしたホストファミリーとの出会いです。私は家に居た

時はほぼずっとホストマザーと色々な話をして楽しました。フィリピンの方でしたが、とても英語が上手く、いつも笑顔で明るくて私を励ましてくれました。ホストマザーが言ってくれた、忘れられない言葉があります。「英語を勉強するためにここに来たのだから日本人の友達といても英語をしゃべるようにしなさい。私はあなたにここでたくさん学んでもらいたい。」これを聞いた時は本当にうれしかったのを覚えています。勉強になるようにと、一緒にビデオを見たりもしました。彼女の子供とも、同じように滞在していた学生とも仲良くなれて、もう一つの家族のようでした。

英語の勉強をする良い機会をもらい、温かいホストファミリーに出会えたこの経験はすばらしい思い出になりました。